

しょうがくせい みな
小学生の皆さんへ

ねんまえ にほん せんそう とき ひろしま ながさき げんしばくだん お おお な かがた
75年前、日本が戦争をしていた時に、広島と長崎に原子爆弾が落とされました。多くの亡くなった方々のこ
おも へいわ ねが きねんしきてん まいとしひら ことし しんがた かんせんかくだいぼうし
とを思い、平和を願う記念式典が毎年開かれてきました。今年、新型コロナウイルス感染拡大防止の
さんれつ にんずう へ かいさい せかい さまざま きけん うご なか かくへいき
ため、参列する人数を減らしての開催になりましたが、世界で様々な危険な動きがある中、核兵器
おそ なる なん つた せきん かん
の恐ろしさを何としてでも伝えなければという責任を感じます。

ことし ひろしま げんしばくだん お ひ まえ おも だ ねんほどまえ
今年の8月6日(広島に原子爆弾が落とされた日)を前に、ふと思い出したことがあります。もう30年程前、

おばやしせいしん ちゅうがっこう じゅぎょう と あ とくしゅう なつふく しょうじょ ばんぐみ いま み
小林聖心の中学校の授業で取り上げた NHK特集「夏服の少女たち」という番組です。(今はDVDで見る

ことができます。) 1945年(昭和20年)8月6日、学徒動員(学校の生徒たちが働くこと)の作業中に原子

ばくだん な ひろしまだいいちこうとうじょがっこう ねんせい さい さい はなし しょうじょ
爆弾で亡くなった、広島第一高等女学校の1年生(12歳~13歳)220人をめぐのお話です。少女たちの

のこ にっき まじ ひび つづ せんじちゅう もの
残した日記をたどりながら、アニメーションも交えて、8月6日までの日々が綴られています。戦時中の物が

なに なか しょうじょ ははおや ふる ぬの りよう みづか て なつふく ぬ なつふく み
何もない中、少女たちは母親のお古の布を利用して、自らの手で夏服を縫いました。その夏服を身につけ

すがた いっしゅん いのち うば おやご とど むざん や こ
た姿で、一瞬にして命を奪われたのです。親御さんのもとに届けられたのは、無残に焼け焦げボロボロに

なつふく ご なんじゅうねん あいだ のこ なつふく たいせつ まも おさな な むすめ
なった夏服だけでした。その後、何十年もの間、残された夏服を大切に守ることで、幼くして亡くなった娘

かな おも だ つづ おやご すがた むね せま
を悲しく思い出し続ける親御さんの姿には、胸に迫るものがありました。

ばんぐみ み あと ねが どうじ おばやしせいしんちゅうがっこう か てがみ い
この番組を見た後、NHKにお願いし、当時の小林聖心中学校1年生の書いた手紙を、まだ生きていらっしや

おやご とど なんにん おやご てがみ こうりゅう う
る親御さんのもとへ届けていただきました。そして、何人かの親御さんからお手紙をいただき、交流が生まれ

わす
たことは忘れることができません。

こんかい へいわせんげん なか ひろしま まついしちょう せかいじゅう ひとびと かくへいき も せかい
今回の平和宣言の中で、広島の松井市長は「世界中の人々が核兵器を持たないことと世界がいつまでも

へいわ じつげん む れんたい たが きょうりよく たいせつ うった
平和であることの実現に向けて『連帯(互いにつながって協力)』すること」の大切さを訴えるときともに、

しんがた きけん の こ せかい れんたい か きょうちゅう
新型コロナウイルスの危険を乗り越えるためにも、世界の「連帯」が欠かせないことを強調しておられまし

た。「分断(つながりを切って別々になること)ではなく、連帯を生きること。」これこそ、様々な地球全体の

かだい かか じんるい すす みち れんたい えら じんるい ほろ まね
課題を抱える人類が進むべき道です。「連帯」を選ばなければ、人類が滅びてしまうことさえ招きかねませ

ん。

せいしんじょしがくいん みな せかい いちいん れんたいかん しめいかん
聖心女子学院は、皆さんが「世界の一員としての連帯感と使命感を

も よ しゃかい きず こうけん けんめい じよせい ねが
持って、より良い社会を築くことに貢献する賢明な女性」となるよう願

きょういく がっこう じぶん しょうらい かたち れんたい い
って、教育している学校です。自分は将来どんな形で「連帯」を生



き、「希望きぼうのつくり手て (Artisans of Hope)」となっていきたいか、是非ぜ ひ、夏休みなつやすのゆとりある時間じかんの中で、思おも
い巡めぐらしてみてください。